大国主神行は一か月あまりの超スピードで完了したが、その後を受けて天上の仕組みもあっという間に進行した。平成四年三月一日に太陽系の主であるアメノトコタチ大神が復権し、続いて三月十五日には宇宙の主神であるアメノミナカヌシ大神が復権した。これらの神はいずれも天の父神、つまりタカミムスビ大神によって実権を奪われ、幽閉されていた神であった。

地上に仕組まれていた神の計画は、宇宙全世界を変革する驚異的なものであった。神界の秩序の狂いは創造主を含めた全宇宙におよぶもので、それを根本的に正すことが、今回の神界劇ではめざされていた。つまり、キリスト教によって創造主と呼ばれている天の父そのものが、秩序紊乱の首謀者であって、この存在が真の創造主を封じ込めて全宇宙を支配していたのであった。ここに闘争ばかりが繰り返される乱れの根幹があったのである。だが、その狂いも今回の神界劇によって正された。オオクニヌシ大神が地球の主権を回復し、アメノトコタチ大神が太陽系の主権を回復し、アメノミナカヌシ大神も宇宙の主権を回復した。このことは宇宙全世界の画期的な出来事であって、ただ単なる地球上の、しかも人間世界のみにかかわりのある事件ではない。

アメノトコタチ大神が太陽神界に復帰したことによって、今まで太陽神とされてきたアマテラス大神はその地位を解かれ、別の星へと住まいを移された。地球

における主権が失われたのと同様に、太陽系における主権も失われたからである。アメノミナカヌシ大神の復権によって父神の主権も失われたが、それも元のあるべき地位に帰されたということであって、父神神界全体がつぶされたということではない。天律違反をおこした父神と、それに連なる旧体制側の責任者たちは、それぞれみなその地位を解かれて反省の機会を与えられる。そしてその後に正しい父神が立つことになる。

　アメノミナカヌシ大神が復権して、宇宙の狂った秩序は正された。そう思ったのも束の間、宇宙の神秘はまだまだその奥にあった。日本神話ではアメノミナカヌシ大神以上の神はない。仏教が言う空無や、一神教が言う創造神は、釈迦やキリストのいる根元界より一段階高い無元界に対応していると前述しておいた。無元界とはすべての表現体が消えて魂の光だけが存在する世界なのだけれども、この世界を表現世界に現している星が、アメノミナカヌシ大神のいる大空星なのである。開かずの星として機能を停止していたこの星が開かれて、アメノミナカヌシ大神が復権することによって、宇宙秩序は完全に正されたように思われた。

　ところが、宇宙にはまだその奥があることがわかってきた。宇宙には光と闇があるように、生命体が存在する世界にはもっと別な領域があったのである。地球は太陽という恒星の周囲を回る惑星で、ここにわれわれ人間を含めた三次元物質

生命体が住んでいるわけであるが、神界の神々は自ら光を発する恒星に住んでいるのが普通である。もちろん地球や月にも神々は生息しているわけだが、それはどちらかというと特殊な領域であって、神々の本拠地はあくまでも光を発する恒星にあるのである。恒星は宇宙空間においては、暗い闇のなかで光を発して存在している星である。惑星の地球や、その衛星の月などは、そうした恒星の光に守られて維持されているわけで、この光がなくては生命体は存在できない。神とは光なのであるが、闇のなかに光で成り立っている世界が神界と言われる領域なのである。

宇宙の星々の世界を越えた根元界に闇はない。星より強くて明るい光の中に表現の基本世界が存在しているだけである。古代ギリシャ哲学で呼ぶイデアの世界である。プラトン、釈迦、モーゼス、キリストたちはこの世界に入って行った。この領域からもう一段階上の次元に昇ると無元界に入るわけであるが、この世界の光は根元界よりもさらに強く、表現体が消えてしまう。だが光の世界はそこで終わるわけではない。光の度合いは強くなってさらに奥へと連なっていくのである。そして、その光の充満している世界には、黒い光を発している闇の星があるのである。表面が黒いため周囲の光を吸収してしまうが、中には表現体が生きられる程度に明るくなっている。そうした闇の星々で成り立っている世界を魔神界

と呼ぶのである。

宇宙は光と闇のバランスの上に成り立っている。しかもそればかりではなく、光の世界、闇の世界がそれぞれ鏡に写っているような感じの虚在界がある。自分とそっくり同じ存在が向こう側にあり、その自分には絶対に会うことはできない。そんな世界のことを現代科学はパラレルの世界として理論的に考察しているが、ミタマ（魂）を浄化させて次元を昇っていくことによって、そうした世界があることがわかってきた。それはアメノミナカヌシ大神を復権させた後に出てきた課題だったわけだが、こうした世界が現れ出てきたことによって、神界劇はさらにスケールの大きな、そして宇宙の根本的な領域へと分け入っていくことになったのであった。

光の世界と闇の世界、そしてそれらを支えるパラレルの世界、その四つの領域を超えていくと宇宙全体を統轄している領域に突き抜ける。その領域こそが創造界と呼ばれるにふさわしい世界であって、その世界を神々は天上界と呼んでいる。この世界はもちろん表現世界ではなく、意識のみが融合合体しているような領域なのであるが、この領域を表現世界に降ろした星が宇宙の奥にあるのである。大空星よりもレベルの高い所があるわけだが、この星は神々ですら簡単には見えない星で、この星こそが光と闇の両世界を統轄する宇宙の真の主の星なので

ある。この星のことを「開ける星」と神界では呼んでいる。

開ける星はアメノミナカヌシの星である大空星と同様、今までその機能を停止していた。旧支配者父神によって封じ込められていたからである。父神は真の宇宙の主を封じ込めて消し去り、アメノミナカヌシの権威を奪うことによって神界の主として君臨し、魔神界との交流を遮断して宇宙を四分の一の狭い領域に限定してしまった。そして、自分に対抗した母神や子神を根の国（堕落界）へ落とすことによって魔物扱いし、それでもって神と魔の対立構図を作り、宇宙の真実を歪めてしまった。そのため宇宙世界は正しい形を見失い、幻想と錯覚の世界へと導かれていくことになったのであった。神界劇の地上の仕組みを仕上げて天上の仕組みに取り組んでいくにつれて、そうした宇宙の神秘、真実が次々と明らかになっていったのであった。

そこまで視点を上げて、今回の神界再編劇の真の意味をもう少し先に進めて見ていくことにしよう。というのも、天上の仕組みに取り組むことによって宇宙の真実が明らかになり、それにつれて神界の秩序が正常化されていくと、さらに驚異的な秘め事が明らかになってきたからである。そこから見ると、二十一世紀新時代は予言されてきたものよりもはるかに規模の大きな変革であり、思いがけない真相が現れつつ進行し、新たな宇宙時代を開くものになっていくことがわかっ

てくる。

天上の仕組みを進行させ、宇宙浄化の仕事を続けていくうちに明らかになってきたことは、神界の神々は旧体制派と正統派に分れているということであった。それは父神対母神の対立という構図とはまた別なものだった。たとえば父神について言えば、父神神界全体が旧支配サイドに立っているわけではなく、地系神同様根の国に封じ込められている父神もいたということであった。そのような父神を正統派父神と呼んで区別しておくけれども、こうした事実は父神ばかりではなく、アマテラス神界やその他の天系神の神々にもあることがわかってきた。それば かりか、地系神扱いされる母神や子神系統の神々の中にも、旧支配者側の立場に立っている神々がいるということも判明してきたのだった。

考えてみればそれも当然のことなのである。どの神界の神であれ、支配体制に順応しなければ生きられないわけで、そのことだけを取り上げて正邪善悪を決めつけるわけにもいかない。しかし、そうなってくると旧支配者と正統派の区別はどこでつければいいかという問題になってくる。この問題はじつにやっかいで説明が難しく、また信じがたい内容のものなので、本書では触れたくなかったのであるが、神界劇が進行していって、過去の神行のやり直しまで始まってしまった今となっては、このことを説明しておかないと、誤解を招くことになってしま

う。それほど神界劇第二部は意外な展開をしているのである。しかし、それはまだ進行中であって、完全な決着がついていないため、その概略を説明することにとどめるしかない。

異次元の領域に思凝霊界と呼ばれる世界がある。筆者はこの世界を思念界と呼んでいるのであるが、ここは霊界の一部ではあるが、一般にいわれる霊界とは違う、想念で成り立っている独特の世界なのである。あらゆる生命が生きていく過程で抱くさまざまな思いが、凝り固まることによって表現体が発生する。思念界とはそうした想念や願望などが形作る世界なのである。たとえば支配欲、これがオロチと呼ばれるヘビの姿となって現れる。所有欲（金銭欲）は金毛九尾と呼ばれるキツネの姿となり、思い上がりの念が生み出すのが鬼である。これらを三大魔物と呼ぶのであるが、世にマモノと呼ばれるもの、それがこの世界の生き物であって、それらは多種多様の姿をとってうごめいている。

もっともこの思念界の生き物は魔物ばかりではない。人間の場合を考えてみても魔的な欲望ばかりを湧きたたせているわけではない。勝利の女神とか、正義の神とか、真理の神といった西洋的な想念の神々もこの領域に入る。そのほか幸福願望とか、栄達の思いなども表現体を生み出していくのである。空想とか創造とか幻想といった想念がかかわるのがこの領域で、それはなにも人間だけがつな

がっているわけではない。神々をはじめとする生きとし生けるものすべてがかかわっている世界なのである。

神界劇とのからみで問題となるのは、その中の三大魔物と呼ばれているもの、とくに支配欲としてのオロチなのである。このオロチという多頭のヘビは、世界中で語られ絵に描かれてきているので、本書を読むほどの人なら知らない人はいないだろう。日本ではスサノヲ神話で名高い八叉の大蛇で語りつがれてきている。この支配欲の権化であるオロチこそが、じつは旧支配者父神にとりついて、宇宙を支配していたのである。そして旧支配者組織はオロチを中心とする魔物軍団だったということが、宇宙秩序を正していく過程でわかってきたのであった。至高至善の存在として神々を崇めてきた人々に、こうした現実を受け入れてもらうのは簡単なことではないだろう。しかし、真実を隠していては神界劇は語れないので、不信を招くことになる危険を承知で、あえてその内容に触れておきたいと思う。

人間であるならば、自分が生きている世界でトップになりたいと誰でも思うはずである。あるいは誰だってたくさんのお金を得たいと思うし、欲しいものを所有したいと願う。またそれなりの地位についたり、人並み以上の能力がある者は、思い上がったり傲慢になったりする。こうしたことは日常当たり前のことで

あるが、そうした思いはなにも人間世界特有のことではないのである。高貴な神々といえども、その住む世界においては人間同様の生活形態があって、ほとんど同じような欲望にとらわれながら生きている。この現実が認められない人には、この話を受け入れることはできないかもしれない。

神々にも個性がある。得手不得手がある。善悪の立場の違いもある。才能ある神、力のある神は、地位を求め、誉れを受けたいと思いながら生きている。そして星の主は、宇宙の主となってすべてを支配したいという願いを持っているかもしれない。しかし、宇宙には定まった秩序がある。そこには一定の基準があるので、簡単にその秩序を乱して宇宙の主になることはできない。しかし宇宙世界には正しい秩序があると同時に、実力を行使する自由も与えられている。欲望、願望を達成することが可能な仕組みで運営されているのである。人間は天国を考えるとき、すぐに理想郷を思い描くけれども、それはあくまでも幻想の世界であるに過ぎず、現実にそんな世界で生きればすぐに退屈して生き甲斐をなくしてしまうにちがいあるまい。神々といえどもそれなりに欲望願望がなくては生きられないものなのである。

神を理想化して思い描くのは勝手だが、理想と現実はまったく違うということも知っておく必要がある。その現実の世界で宇宙を支配しようと願って、それを

達成した神がいたのである。それが父神であった。本来宇宙の主は、子神であるオオクニヌシの系統の神が立つのが正しい秩序なのだが、父神は開ける星のオオクニヌシ大神の地位を実力で奪った。そうして光と闇を司る開ける星の主を覆い隠すと、光の世界、つまり神界の主である大空星のアメノミナカヌシ大神の権威を奪って自分のものにしてしまった。これが宇宙秩序の乱れの根本原因であった。このときから宇宙はオロチの支配に代わり、全神界全宇宙に魔物がはびこっていくことになったのである。

魔物は想念体であるので、他の表現体、つまり神とか人間にとりついて生きていく。そのため神の正体が見えなくなってしまう。正当な神であるのか、魔物に支配されている神なのか、その区別が神々自身にすら見分けられなくなってしまうのである。ここに神々が争い狂う原因があったのである。そして、そうした神々の争いが長い間続けられていくうちに、押し込められた側が、必ずしも正しいとばかりは言えなくなってしまったのであった。つまり強いものが次々と宇宙の実権を奪い取って反対派を封じ込めていったからである。

確かにはじめは正統な秩序が保たれてはいた。初代の乗っ取り犯の父神が押さえ込んだのは正統派の神々であった。ところが乗っ取り支配はそれから何代も続き、その間には金毛九尾に操られた母神（黒髪夜叉とかイザナミ）やオロチのス

サノヲとか、あるいはオロチ系のキクリヒメとオオクニヌシが結びついた形での宇宙支配、といったものが現れていったのである。そうして宇宙秩序はすっかり魔物の秩序に切り代わってしまうことになったのであった。そして二十世紀までの現代宇宙を支配していたのは、何度目かの父神支配ということだったのである。もちろんそれは神々の争いであって魔物の支配ではないと言うこともできよう。過去の宗教はすべてそう言って表面上の美しい神々、幻想的な神々ばかりを説き続けてきたのだから。しかしその一方で彼らは、意識していたかどうかはわからないが、その真実をつかみ取ってはきたのであった。

インドの宗教画を見たことがある人なら、ヒンズー教の主神であるヴィシュヌがオロチの上に寝そべって、宇宙創造を夢想している絵があることを知っていることだろう。そしてまた、ヘビが巻きついた神々が異常に多いということにも気がついていることだろう。それは神々がオロチ系であることの表示にほかならないのである。ところが、ヘビは神の使いであると説明されると、世の善男善女は疑いもしないでそれを正しい神として信じ込んでしまうことになる。オロチ信仰が神の名のもとにそうして始まり継続されていったのである。

蛇神信仰はもちろんインドばかりではなく世界中にある。日本でもヘビは神の使いと信じられてきた。ヘビが魔物だというわけではないが、ヘビはオロチの象

徴なのである。ヘビのイメージは、宗教界では神秘的領域を含めてかなり広く深く浸透している。オロチがヘビなり、オロチそのものとして現れていれば、誰もそれを神であるなどと信じはすまい。しかし、オロチが神の姿に化けているとしたら、それを見分けることは容易なことではないのである。それは金毛九尾が化けた女神や、鬼が化けた神でも同様であろう。

宇宙秩序の狂いが、魔物がからんだ権力闘争の結果によって生じていたことがわかってくると、神界劇の意味はまったく違うものになっていった。正しい秩序を回復しようとする神界劇そのものが、魔的な権力闘争に過ぎないものになってしまいかねないからであった。神界劇第一部でなされた三つの神行、つまり白山神行、国常立神行、大国主神行は、天系神である父神やアマテラスの封じ込めを打ち破って、根の国に埋没していたそれぞれの神界を復活させるためのものであった。ところが復活した神々が正統な神々ではなく、権力闘争に敗れて封じられていた魔的な神々だったとするならば、それだけでは宇宙秩序が正常化するはずはない。父神に代わる別の支配体制が築き上げられるだけのことだからである。

神界劇第一部の神行は、魔的な父神の支配を打破するためのものであった。確かに地球神界においては、父神の呪縛を解きほどくことができた。そして封じら

れていた各神界の神々を復活させることにも成功した。ところが地上の仕組みをし終えて天上の仕組みに取り組んでいくにつれて、宇宙はわれわれが住んでいる宇宙ばかりではなく、もっともっと大きな別宇宙へと広がっていくことがわかってきた。そしてそれらの全宇宙を、父神オロチが支配していることもわかってきたのであった。それと同時に地球神界に復権した神々が、必ずしも正当な神々ではなく、玉石混合した善悪雑多な神々であることも明らかになってきたのであった。そうした神々の権力闘争の結果、正しい秩序というものが何代も下に埋もれていることが判明したとき、神界劇第二部の仕組みが浮上してきて、さらに大きな神界再編劇が始められることになったのだった。

神界劇第二部は、魔的な支配のすべてを解除して、真の意味での正統な秩序を立て直すためのものである。それはツキヨミを含むスサノヲ神行から始められ、アマテラス神行、丹生都比売神行、龍宮神行、空の神界行、そして父神神行と続いていった。それらは埋もれている正統な神界を復活するためのもので、第一部の神行とはその意味内容に違いがある。そして、第一部で復活した白山神界、国常立神界、大国主神界も再度の復権神行がなされることになっている。

神界劇第二部はかなり早いペースで進行しているが、まだ終了してはいない。こうした神行によって神界の状況にもかなりの変化が現れているので、平成五年

末の段階で、第一部の神行とのズレを少し調整しておくことにしよう。正常化が完全に達成されないかぎり、神界の情報も正確なものとはならないし、現段階のものも過渡期のものと考えておいてもらわなくてはならないけれども……。

たとえば国常立神行では、富士山に封じ込められていたクニトコタチ大神が復権して立ったが、魔王として恐れられていたこの神は本来富士神界の神ではないので、宇宙秩序が正されていく過程で大空星へと昇って行かれた。そして正統派の父神が復権する父神神行によって、富士山には新たな父神が立たれた。またアマテラス神行によって正統派のアマテラス神界が再建されたが、それにともなって伊勢の内外宮には本来の太陽神であるアメノトコタチ大神と、その妻神であられるワカヒルメ（ニブツヒメ）大神が入られた。

こんなふうに神界では現在大きな変動が起こっていて、その情報を現段階で正確に伝えることはできない。天上の仕組みが進行していくにつれて、神界の正常化がはかられていくことになっていったわけであるが、その動きにともなって地上人間世界にもその動きが現れている。たとえば日本においては、五十五年体制の自民党政権が崩壊したし、イスラエルではパレスチナとの和合の動きが現れた。インドでは正当な守護神であるクニトコタチ大神の復権発動があった。それが三万人を越える被災者が出た平成五年九月の大地震である。このほか細かく見

ていけば、神界再編の動きは地球人間世界にさまざまな波紋を描いていることがわかるのであるが、そうした神界劇第二部にかかわることは本書の主題ではないので、これ以上は触れないでおこう。

二十世紀末の今起こっている変化は、宇宙新生の動きであって、けっして人間世界のみの出来事ではない。全宇宙を包み込んで進行している神界劇は、信じがたいことではあるけれども、地球人間世界、しかもわれわれの日本が舞台となって行われている。神界を変革するような大きな仕事を、なぜ次元の低い人間がしなければならなかったのか、どうしてそんな行為が人間に可能なのか、といったような疑問や不信感がわくのも当然のことと思われるが、そうしたことも本書では取り上げないでおこう。そうした秘め事は容易に説明のつけられることではないし、神と人間の連続性というものを理解しないと、受け入れられない問題だからである。